



1998年5月12日のトゥリスアクティの悲劇 (Tragedi Trisakti 98) について

河 田 幸 視

概要 1998年5月12日、西ジャカルタ市グロゴールにあるトゥリスアクティ大学で、街頭での抗議運動から戻ってきた学生に向かって治安部隊が発砲し、4名の学生が死亡した。この事件は翌13日に発生したジャカルタ5月暴動や、21日のスハルト大統領の辞任につながったともいわれている。本資料は、トゥリスアクティ大学の関係者によって事件の直後にまとめられた文献等を基に、この事件の詳細を紹介する。

キーワード ジャカルタ5月暴動, トurisアクティの悲劇, 5月政変, 民主化, レフォルマシ

原稿受理日 2020年5月12日

Abstract On 12 May 1998, the anti-riot police and military shot live bullets at students who had just come back from the street rally to the campus of Trisakti University in Grogol, West Jakarta. The shooting resulted in the death of four undergraduate students. It is believed that this tragic incident caused both the May 1998 Riots in Jakarta between 13-14th May and the resignation of Soeharto on 21st. This material introduces the details of the Tragedy of Trisakti based mainly on literature compiled soon after the incident.

Key words May 1998 Riots in Jakarta, Tragedy of Trisakti, Political Change of May in Indonesia, democratization, reform

1. はじめに

インドネシアの近現代史では、大きな転換の契機となった出来事が幾度か発生している。スカルノによる1945年8月17日の「独立宣言」、共産党によるクーデター未遂事件といわれる1965年の「9・30事件 (G30S/PKI)」, スハルト政権の幕引きをもたらしたとされる1998年の「トゥリスラクティの悲劇 (Tragedi Trisakti 98)」⁽¹⁾である⁽²⁾。いずれもいわくつきの出来事で、「独立宣言」後は、これを認めないオランダとの間でインドネシア独立戦争が起これ、国際的に独立した主権国家として認められたのは1949年12月のハーグ円卓会議であった⁽³⁾。「9・30事件」は、高インフレにさらされ、また、対マレーシア政策のゆき詰まりの中で国連から脱退し (水本, 2006, p. 171; 岩崎, 2017, p. 139; 加納, 2017, p. 128), 次第に国際社会において孤立の度を高めるスカルノから、次第にスハルトへと権力が委譲することになった発端ともいえる事件であり、現在でも、その真相には不明な部分がある。「トゥリスラクティの悲劇」は抗議運動を終えてキャンパスに戻った学生たちの集団に対する発砲によって、西ジャカルタ市にあるトゥリスラクティ大学 (Universitas Trisakti) の4名の学生が死亡した事件であり、翌13~14日のジャカルタ5月暴動 (Kerusuhan Mei 1998) の発生や、21日のスハルト大統領の辞任につながったとされるが (Soekisno Hadikoemoro, 2000, p. ii; 日本経済新聞, 2017など), 未解明の部分が残されている。

これらの中でトゥリスラクティの悲劇は、筆者の知る限り、邦語文献では断片的な紹介にとどまることがほとんどである。事件発生までのトゥリスラクティ大学の様子や事件の詳細について、邦語文献では未紹介の事項が多くある。本資料は、主に Soekisno Hadikoemoro (1999, 2000) および René L. Pattiradjawane (1999) に依拠しながら、その紹介をおこなうものである。また、筆者はトゥリスラクティ大学における初のサバティカル訪問者として、2019年9月から1年間の予定で滞在する機会を得ており、断片的ではあるが、その間に見聞したトゥリスラクティの悲劇にかかわる事項も紹介する。

(1) 邦語文献ではトリサクティの表記を目にすることが多いが、本資料では、実際の発音により近いと思われるトゥリスラクティを用いる。トゥリスラクティの表記は、他にも、例えば西村 (1998) で用いられている。

(2) 1945年の独立宣言から1998年のスハルトの退陣に至る間の出来事で、本資料とかわりの深いものは、増原 (2012, pp. 103-108) に端的にまとめられている。

(3) オランダはインドネシアの独立日をハーグ協定が発効した1949年12月27日とみなしてきたが、2005年8月17日の60周年の独立記念日に先立って見解を改め、1945年8月17日であると認めた。

2. インドネシアおよびトゥリスアクティ大学の概要

2.1. インドネシア

世界196か国⁽⁴⁾の中でインドネシアは14番目に大きな国土面積を有し、2.5億人を超える人口は世界で4番目に多い。1万を優に超える島嶼からなる国土は東西方向に長く、パプアニューギニアとの国境にもなっている東経141度線は日本では北海道小樽市に相当し、西端はミャンマーと同じ経度に達する。この、アメリカの東西距離よりも長い版図 (佐藤, 2011) の中には300もの民族が暮らし、200とも500ともいわれる多様な言語が使われている。こうした複雑な民族・言語構成は、かつての土着国家の領域を反映したものではない。他の多くの東南アジア諸国の例にもれず、旧宗主国による線引きを継承したことの表れであり (西岡, 1993, p. 105; 岩崎, 2017, p. 48), 現在のインドネシアは、かつてのオランダ領東インドの領域に成立しているといえる (倉沢, 2013, p. 182; 加納, 2017, p. 55)。インドネシアは1945年の独立宣言以来、この領域の確保・保持に心を砕いてきた。

国歌であるガルーダ・パンチャシラには、「多様性の中の統一」という言葉が刻まれている。民族、宗教、人種、社会階層 (笹岡, 2013, p. 240) が複雑に入り組む中での国家統一の維持は、容易ではない。スカルノは大統領に強い権限を集約させ、スハルトはスカルノが構築した仕組みを継承しつつ、開発独裁を進めていった (加納, 2017, p. 62)。大国の干渉を避けながら、国家主権の維持と国益の獲得が目指されてきた (水本, 2006, pp. 169-170)。スカルノは、対外的には西側・東側諸国のいずれにも与しない非同盟主義を掲げつつ、1955年にバンドン会議を開催し、対内的には1959年にいわゆる「指導される民主主義」を導入して急進的な対外政策を進めたものの、次第に容共の度を強め、経済的にはインフレによる危機に直面した。9・30事件や1966年の「3・11政変」 (倉沢, 2013) を経ながら、次第に権力を掌握したスハルトは、1968年3月に第2代の大統領に就任した。

これと前後してスハルトは、1966年3月の国連への復帰、1967年8月のASEANへの原加盟国としての参加といった形で、西側陣営に軸足を置きつつ (水本, 2006, p. 169), 開発独裁の形ではあるものの、驚異的な経済発展を現出させた。その功績から、スカルノは1983年に国民協議会 (MPR)⁽⁵⁾ で「開発の父 (Bapak Pembangunan)」の称号を贈られ、

(4) 2020年4月現在で日本が承認している195か国に日本を加えた数 (外務省, 2020)。

(5) MPRは国民協議会 (Majelis Permusyawaratan Rakyat Republik Indonesia) の頭字語である。なお、DPRは国会 (Dewan Perwakilan Rakyat Republik Indonesia) で、以後、国会議事堂を指す表現としてMPR/DPRを用いる。近年は、DPR/MPRと表記されるが、本資料ではMPR/DPRで統一する。

1993年の世界銀行による『東アジアの奇跡』の中でもインドネシアが取り上げられた。一方で、1980年代にはスハルト一族のファミリー・ビジネスが横行するようになった。1997年7月にタイで始まったアジア通貨危機の影響の下でインドネシア通貨ルピアの価値が下落し続ける中、燃料費等の値上げが国民の反発を買い、KKN⁽⁶⁾と呼ばれる汚職・癒着・縁故主義の撲滅、Sembako⁽⁷⁾と称される生活必需品の値下げ、さらにはスハルトの退陣を求めるデモや暴動が各地で激しさを増して収拾がつかなくなり、1998年5月にスハルトは大統領の職を辞した。

この一連の動きは民主化運動であり、開発独裁を採っていた他の東南アジア諸国でも、1980年代後半頃から生じていたことであった（岩崎，2017，p. 149）。インドネシアにおいて民主化は、より広い概念である改革を意味するレフォルマシ（Reformasi）という言葉に込められて表現された。スハルトの退陣後、国民協議会で憲法が改正されて国民が正副大統領を直接選ぶことになり、初の直接選挙が2004年に実施され、ユドヨノが選出された。これをもって、インドネシアは民主主義体制に移行した⁽⁸⁾。

2.2. トゥリスアクティ大学

トゥリスアクティ大学（以下、略称 Usakti を用いる）は、ジャカルタ首都特別州およびボゴールに複数のキャンパスを有する私立大学で、法学部（Fakultas Hukum）、経済・ビジネス学部（Fakultas Ekonomi dan Bisnis）、医学部（Fakultas Kedokteran）、歯学部（Fakultas Kedokteran Gigi）、土木工学・計画学部（Fakultas Teknik Sipil dan Perencanaan）、産業技術学部（Fakultas Teknologi Industri）、地球技術・エネルギー学部（Fakultas Teknologi Kebumihan dan Energi）、造園・環境技術学部（Fakultas Arsitektur Lanskap dan Teknologi Lingkungan）、美術デザイン学部（Fakultas Seni Rupa dan Desain）を擁する総合大学である。大半の学部は西ジャカルタ市グロゴールに位置するメインキャンパスのAキャンパスにあり、そのすぐ東側のBキャンパスに医学部と歯学部が位置している。経済学部は東ジャカルタ市のFキャンパスも使用している。トゥリスアクティの悲劇の舞台となったのは、Aキャンパスである。グロゴールに位置するこれらのキャンパスは、独立記念塔（Tugu Monas：図1の㉑）から5 kmほどで、やや遠い

(6) korupsi（汚職）、kolusi（癒着）、nepotisme（縁故主義）の頭字語。

(7) sembilan bahan pokok を縮めたもので、コメ・サゴヤシ・トウモロコシ、ザラメ、野菜・果物、牛肉・鶏肉、揚げ油・マーガリン、ミルク、卵、灯油・プロパンガス、ヨウ素・ナトリウム入りの塩の9品目のこと（舟田他，2018，p. 603）。

(8) 佐藤（2011，p. 128）は1998年までをスハルト体制期、2004年以降を民主主義体制期と位置付けている。

1998年5月12日のトゥリスラクティの悲劇 (Tragedi Trisakti 98) について (河田)

ものの徒歩で移動できる距離であり、Usakti がデモに関係しやすい原因の1つといえる (私信)。

Usakti の HP では、1965年11月29日を設立日と明記する一方で、1965年に閉鎖された Universitas Res Publica (以下、略称 Ureca を用いる) の建物があった場所に再建されたこと、政府によって設立された唯一の私立大学であることを説明している (Trisakti University, 2020)。そのあたりの事情は、邦文では、倉沢 (2017) に詳しく述べられている^⑨。Ureca は、その前身となる物理・数学アカデミーが1958年に開設された。1959年に

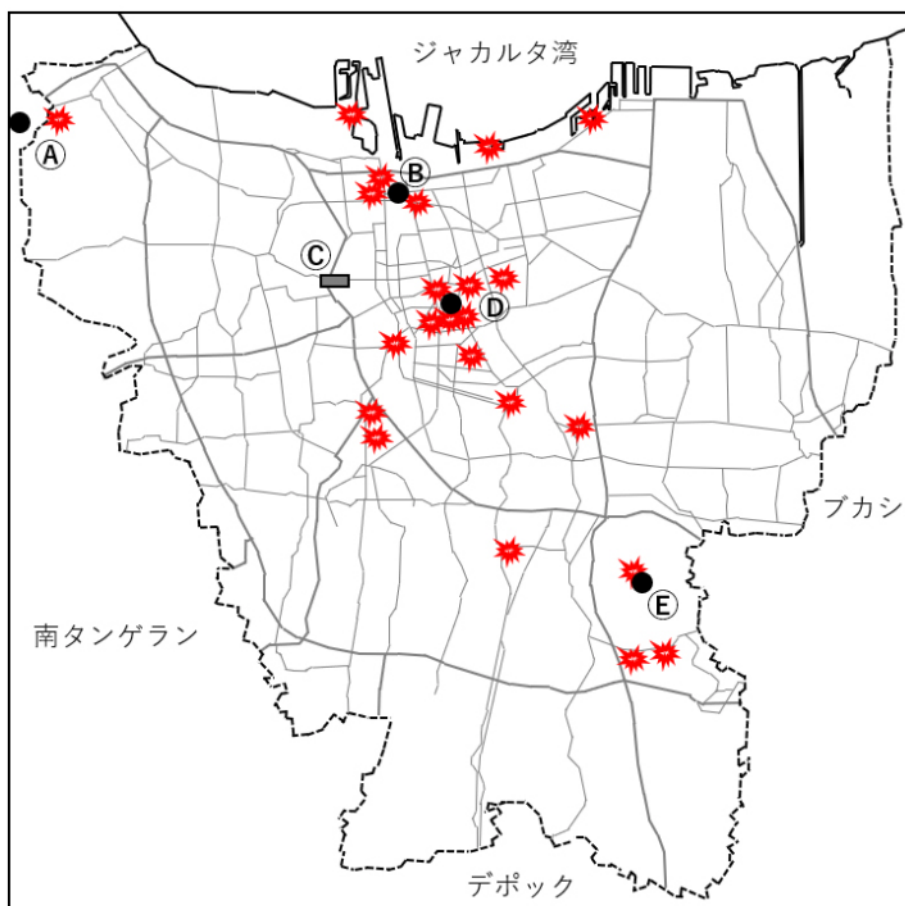


図1 ジャカルタ5月暴動の発生場所

注：インドネシア銀行博物館 (Museum Bank Indonesia) の展示パネルをもとに筆者作成。
ジャカルタ湾と破線で囲まれた範囲は、ジャカルタ首都特別州。①スカルノ・ハッタ国際空港、②ジャカルタ・コタ駅、③トゥリスラクティ大学とその近辺 (図2に描かれた範囲)、④独立記念塔、⑤ハリム・ベルダナクスマ国際空港。

⑨ 以下、本段落の内容は、主に倉沢 (2014, 2017) に基づく。

歯学部、1960年には法学部と工学部ができ、10月28日に正式に大学となった（Welch, 2011）。Ureca は、当時、華人系インドネシア人⁽¹⁰⁾の国立大学への入学が困難であったことから、1954年に設立された華人団体の国籍協商会（Badan Permusyawaratan Kewarganegaraan Indonesia；略称 Baperki）がイニシアティブをとって設立し、当初はこの団体の略称から Universitas Baperki とされていたものが、1963年に Universitas Res Publica に改称されたものである。前述の9・30事件の後、10月11日に左翼系の他の13大学とともに閉鎖され、15日⁽¹¹⁾には焼き討ち事件が発生した。Ureca としての復旧も考えられたようであるが、結局は全く新しい大学として、1965年11月29日に Usakti が設立され、現在に至っている。

Usakti は総合大学（Universitas）のため、研究技術高等教育省（Kementerian Riset, Teknologi dan Pendidikan Tinggi；Kemenristekdikti と略される）の管轄下にある高等教育機関である（外務省、2017）。入学に際して宗教等による制約はないが、インドネシアに占めるイスラム教徒の割合を反映してか、現在は、主としてムスリム⁽¹²⁾が学ぶ大学である。Aキャンパスの真ん中に位置するU館（図2）はイスラム教徒のためのモスク（Masjid Asy-Syuhada）であり、毎週金曜日のお昼の礼拝の時間を中心に、常時活用されている。毎日定時にアザーンが放送され、学内の各所に設置された礼拝室等でサラートをやる姿が、ごく普通に見かけられる。教授言語、標識、張り紙等はインドネシア語が標準で用いられており、華人系という雰囲気は全く感じられない。

(10) 本資料では、華人や華人系インドネシア人はインドネシア国籍を有さない人と有する人の両方を含んだ意味で用いる。なお、本資料で引用した文献が意図する華人等の範疇は、必ずしも同じではない可能性がある。

(11) 倉沢（2014, p. 153）では15日とされているが、倉沢（2017, p. 37, 注15）では文書の記録に基づき14日と特定し直している。本資料では、私信での確認も踏まえて15日とした。

(12) Ureca は華人団体の大学、Usakti はムスリムが多いという描写について補足する。Ureca について、倉沢（2017, p. 34）は、「あらゆる人種や宗教の者に門戸を開けていたが、現実には中国系の子弟が圧倒的多数を占めていた」としている。インドネシアにおける華人系インドネシア人の宗教分布は、2010年のデータではあるが、仏教徒が49.06%、プロテスタントが27.04%、カトリックが15.76%で、イスラム教徒は4.65%に過ぎなかった（Coppel, 2017）。スハルト政権下の華人弾圧の下で、国籍協商会との関係を疑われることを懸念した人がカトリックに改宗したことや（倉沢, 2014, p. 215；倉沢, 2017, p. 60）、華人弾圧が緩和したワヒド政権下で仏教徒として登録をしていた華人系インドネシア人が儒教に登録を変えるという動き（加納, 2017, p. 52）を考え合わせると、Ureca が、ムスリムが多い大学であったとは考え難い。Usakti の設立にあたっては、別の華人団体の民族統一育成局（Lembaga Pembinaan Kesatuan Bangsa）が大きな役割を果たしたものの（倉沢, 2014, p. 153）、現在は影響力を失っている（私信）。つまり、Ureca をムスリムが多い大学、現在の Usakti を華人系の大学とは特徴づけ難い。

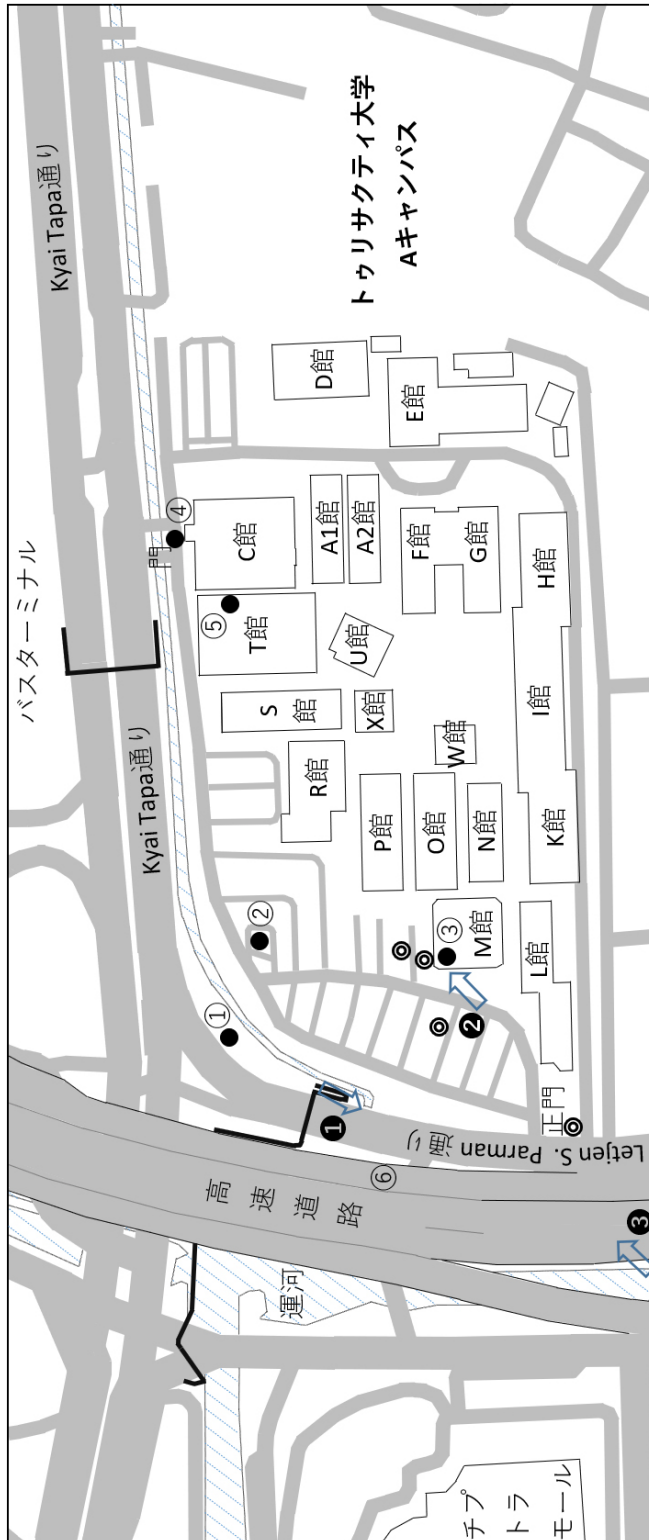


図2 トゥリスサクティ大学とその周辺

注：筆者作成。トゥリスサクティ大学およびチアラモラモール以外の建物は省いた。斜破線は水域、2か所の黒太実折線は歩道橋を示す。◎4名の学生が被弾した場所。①歩道のモニュメント、②駐車場のモニュメント、③博物館、④門横壁面のモニュメント、⑤体育館、⑥フライオーバー、①デモの撮影方向 (写真12)、②M館ガラス窓貫通銃弾痕の撮影方向 (写真9)、③トゥリスサクティ大学正門前近辺の撮影方向 (写真1)。

3. トゥリスアクティの悲劇

3.1. 文 献

筆者が調べた限り、トゥリスアクティの悲劇を中心に扱った文献は、それほど多くはない⁽³⁾。Anggie D. Widowati (2003) の『ジャカルタの赤い空 (Langit Merah Jakarta)』は、イスラム教徒で駆け出しの女性記者を主人公に設定し、その生い立ちから始めて、スハルト体制に対して学生たちが反発を強めていく様子、トゥリスアクティの悲劇、さらにはジャカルタ 5 月暴動などの実際の出来事に取材しつつ、1999 年の大統領選でワヒドが勝利するあたりまでを描いた作品である。その途上、主人公の女性が高校生の時にクリスチャンの華人系インドネシア人と交際をするという場面が描かれる。インドネシアにおいて華人系インドネシア人は、スハルト体制が崩壊するまでは、しばしば迫害の対象とされてきた。また、インドネシアでは、現在でも異なる宗教間での結婚は困難とみなされがちである(私信)⁽⁴⁾。こうした要素を織り交ぜつつ、実際の出来事に比較的忠実に描かれている (Ngatma'in, 2015, p. 2)。

Usakti の学生団体 (Presidium Mahasiswa) によって刊行された『言葉で伝える 5 月 12 日 (12 mei dalam kata-kata)』は、25 篇ほどの詩が収録された冊子であり、事件からちょうど 1 年が経過する 1999 年 5 月を期して編集、刊行されたようである。Usakti の関係者に限定せず、小学生をも含む幅広い人々の作品を掲載している。

Soekisno Hadikoemoro (1999) の『1998 年 5 月 12 日のトゥリスアクティの悲劇 (Tragedi Trisakti 12 Mei 1998)』はトゥリスアクティ大学学生出版会と共同で、インドネシア語で出版されたものであり、翌 2000 年には Lely Triana Djuhari による英語翻訳版が出されている。ただし英語翻訳版には、前半部で新しい内容が盛り込まれるなど、少なくない改変がなされている。

最後に、René L. Pattiradjawane (1999) の『トゥリスアクティが新秩序の暴政を打ち砕く：1998 年 5 月 12 日の血の悲劇についての事実と証言 (Trisakti Mendobrak Tirani Orde Baru: Fakta dan Kesaksian Tragedi Berdarah 12 Mei 1998)』は、トゥリスアク

(3) 市販本に加えて、トゥリスアクティ大学内では、A キャンパスの M 館にある中央図書館および広報部、I 館にある経済・ビジネス学部の図書館で関係する書籍を探した。

(4) 第 3 代大統領ハビビの伝記映画の 2 作目である『Habibie & Ainun 2』(2016 年) では、ハビビの母親が、ハビビがドイツ留学時に知り合ったポーランド出身のクリスチャンの女性に、ハビビと結婚をする場合、インドネシアに移りイスラム教に改宗するか、覚悟のほどを尋ねるシーンがあり、インドネシアでは宗教の違いが困難を生じさせることを描いている。

1998年5月12日のトゥリスアクティの悲劇 (Tragedi Trisakti 98) について (河田)

ティの悲劇が起きた5月12日の17時以降の学生や治安部隊の位置図の掲載 (pp. 75-81)、実弾射撃場所の検証、射撃に用いられた銃の搜索、射撃中やその前後と思しき映像の掲載 (pp. 118-119) といった、その後の成果を踏まえた多くの内容が盛り込まれている。

以下では大きく依拠する文献のうち、René L. Pattiradjawane (1999), Soekisno Hadikoemoro (1999, 2000) を、それぞれ適宜 RP99, SH99, SH00と略記する。

3.2. 前日までのインドネシア全体の動き

スカルノは1959年7月に、議会制民主主義からいわゆる「指導される民主主義」へと移行した。スカルノの強権の下で次第に容共の度が高まる中、1965年に発生した9・30事件を、当時、陸軍戦略予備軍司令官であったスハルト少将が鎮圧した。9・30事件を仕組んだのは共産党であるという見解が流布する中で、スカルノの立場は次第に悪化した。さらに1966年の3・11政変を経て次第に実権を握りつつあったスハルトは、1967年3月の暫定国民協議会で大統領代行となり、翌1968年3月の暫定国民協議会で第2代大統領に就任した。

大統領となったスハルトは、革命を標榜するスカルノの旧体制に対して開発を志向する自らの体制を「新秩序 (Orde baru)」と呼び、バークレー・マフィアをはじめとする経済開発の専門家集団を起用しながら (佐藤, 2011, p. 145; 岩崎, 2017, p. 158)、主に1970年代は輸入代替工業化、1980年代は輸出志向工業化を開発独裁の形で進め、1990年代にインドネシアは新興工業国となった (増原, 2012, p. 104; 佐藤, 2013, p. 265)。

しかし、その利権はスハルトの家族等の近親者に集中しがちとなり、また、長期に亘る経済成長は所得格差を助長したことから、人々は次第に不満を高めていった。スハルトは翼賛政党のゴルガルと国軍を両輪とする強固な体制を構築したものの、1990年代に入るとゴルガルと国軍の間には亀裂が生じていた (増原・鈴木, 2014, p. 215)。1993年にスハルトの長女シティ・ハルディヤンティ・ハストゥティ・ルクマナ (以後、トゥットゥット) や次男がゴルガル党の重要ポストに就任し、その親近者が要職に就くようになると、ゴルガル党内部でも亀裂が生じるようになった (増原, 2012, p. 106; 増原・鈴木, 2014, p. 215)。こうして1990年代前半にインドネシアは過渡期へと移行しつつあったものの、反政府運動は、まだ稀な出来事であった (SH00, p. 12)。

1993年にスカルノの娘であるメガワティ・スカルノプトリが民主党 (現、闘争民主党) の党首に就任したものの、スハルトが介入する形で1996年6月に党首を解任されると、これに端を発して7月27日にジャカルタで暴動が発生した。これはインドネシアにおける民

主化運動の始まりとみなされている（村井・佐伯，1998，p. 46；SH00，pp. 2-3）。1997年5月の総選挙では，メガワティの追い落としなどの周到な準備の下でゴルガル党が圧勝し，1998年3月に予定される大統領選挙でのスハルト再選は，およそ揺るぎないものとなった。

1997年7月にタイでアジア通貨危機が発生し，インドネシアにも波及した。インドネシア語で貨幣の危機を意味する *krisis moneter* から *krismon* と呼ばれたこの危機の下で，通貨ルピアは下落し続け⁽⁵⁾，生活必需品は値上がりし⁽⁶⁾，企業の倒産や解雇が深刻になった。同時期，インドネシアは，民族紛争，飛行機事故の発生や，デング熱の流行，干ばつや大規模森林火災といった食料収穫の減少に結びつく多様で深刻な事態に見舞われていた（村井・佐伯，1998，p. 52；SH99，p. 25；SH00，p. 1）。10月には IMF による融資が決定するものの，これはむしろ経済的な混乱を助長した（増原，2012，p. 106）。

そうした中，1998年3月に，スハルトは大統領に七選された。新たな内閣にはスカルノに親い人物が多く入ったが，中でもスハルトの長女トゥトゥットが社会大臣（Menteri Sosial），ゴルフ仲間の Bob Hasan が貿易産業大臣（Menteri Perdagangan）として選ばれたことに世間は失望した（村井・佐伯，1998，p. 55；SH00，p. 5；増原，2012，p. 106）。さらに，IMF からの融資に際する勧告を受けて，5月初旬には，大統領令によって燃料価格が25～71%の間で引き上げられ，電気料金や公共交通機関の運賃も引き上げられた（SH00，p. 31）。5月12日のトゥリサクティの悲劇の発生は，こうした失策でスハルトに対する人々の不満が否が応でも高まっていた時期の出来事であり，当のスハルトはG15に出席するために，5月9日からカイロに外遊している最中のことであった。

3.3. 前日までの学生運動全般の動き

スハルト政権下で発生した1998年よりも前の学生運動（デモ，集会等）は，1978年にスハルトの大統領三選を阻止しようとしたものが最後であった（SH99，p. 14；花崎，1999，p. 96）。1998年の冒頭の頃はまだ，公衆の面前でのスハルト批判は，収監等を招きうる状況であった（SH00，p. 14）。

2月頃から学生運動は増加した（RP99，p. 122）。ジャワ島，バリ島，スマトラ島，スラウェシ島などにある大学のキャンパス内で発生し（SH99，p. 19），当初は個々の大学でお

(5) ルピアの対米ドル為替レートは，通貨危機の発生当初は1ドル2,500ルピアであったものが，1998年1月22日には1ドル16,500ルピアに達した（SH00，p. 9）。

(6) ジャカルタでは，業者や裕福な家庭が価格高騰を懸念して買い占めに走ったために品薄になり価格が高騰したが，こうした買い占めを，ジャカルタ市民は他都市の人々にも勧めた（SH00，p. 8）。

1998年5月12日のトゥリスアクティの悲劇 (Tragedi Trisakti 98) について (河田)

こなされる散発的なものであった (RP99, p. 121 ; SH99, p. 16)。選挙という手段が意味をなさず、体制打倒を目指すことは弾圧のリスクが高い中、当初のレフォルマシ運動では、抑圧されたデモや対話集会、討論会の形が選ばれたと増原・鈴木 (2014, p. 225) は指摘している。ただし、Soekisno Hadikoemoro (2000, p. 38) では、2月に街頭抗議が頻繁になされていたと指摘している。

3月には、学生運動は様々な都市に及び (RP99, p. 124)、3月3日にはジャワ島中部のスラカルタにある Universitas Sebelas の学生25名が、キャンパス外で治安部隊と衝突して重傷を負った (SH99, p. 27)。当初は学生による運動であったものが、次第に卒業生や教員、知識人をも含む運動へと拡大していき、René L. Pattiradjawane (1999, p. 125) は、学生運動 (gerakan mahasiswa) がキャンパス運動 (gerakan kampus) に変わった¹⁷⁾と述べている。

4月になると、治安部隊との衝突は頻発するようになり、中でも2～4日にジャワ島中部のジョグジャカルタにある Universitas Gadjah Mada で起きた学生運動では、治安部隊との衝突で100名以上の負傷者が発生した。これは、大学のキャンパスの所在地の地名から、Tragedi Bulaksumur Berdarah と呼ばれている。古都ジョグジャカルタでの学生運動は、Anggie D. Widowati (2003) でも取り上げられており、花崎 (1999, p. 101) もジョグジャカルタで大きな運動があったことに注意を促している。治安部隊との衝突で、各地で多数の学生の負傷者が出る中、ジャカルタでは、キャンパス外での学生運動は禁止されたものの、学生はその決定に従おうとはしなかった (RP99, pp. 131-132)。

5月初旬には、改革は2003年の任期終了後までおこなわないとスハルトが発言したことや、燃料価格や電気料金、公共交通機関の運賃の引き上げを発表したことで、学生運動はさらにエスカレートした (RP99, p. 134 ; SH99, p. 34)。5月12日のトゥリスアクティの悲劇が発生する前に、既に学生に対する威嚇発砲、逮捕、負傷や入院が発生していた。なお、1998年の学生運動は、René L. Pattiradjawane (1999) や Soekisno Hadikoemoro (1999) で詳しく取り上げられている。

こうした学生運動の要求は、生活必需品の値下げ、雇用の確保、KKNの撲滅など多様な内容を含むものであった。増原 (2012, p. 107) は、当初は経済改革に関する要求が多く、政治的要求は具体性に欠けていたが、次第に政治的な要求になり具体性も高まったと指摘する。Soekisno Hadikoemoro (1999, p. 36) は、レフォルマシの意味が、当初は経

(17) 本資料では、キャンパス運動である場合も学生運動という言い方をしている。

済危機から脱したいという気持ちを表すものであったが、最後には、国家指導者の交代を求めるものへと変貌したとしている。このように、レフォルマシは、最終的にはスハルトの退陣という形で民主化を求めるものとなった（水本，2006，p. 61；増原，2012，p. 121）。

3.4. 前日までのトゥリサクティ大学の動き

インドネシア各地の動きと比べると、Usakti の学生は世間の窮状に鈍感であり、当初は動きが鈍かったとされる（SH00, p. 17；RP99, p. 141）。その理由として、中流階級ないしは上流階級の裕福な家庭出身の学生が多く（SH00, pp. 17-19）、生活必需品の価格が上昇してもさほど影響を受けず（SH00, p. 17）、授業料を支払う余裕が残っていたことが指摘されている（SH00, p. 18）。そうした中で Usakti の学生が学生運動に関与するようになった理由は、卒業後の就職難であると Soekisno Hadikoemoro（2000, p. 19）は指摘している。ただし、これは Usakti の学生に特有の事情ではなく、この時期のインドネシアの高学歴者は一般に就職難に直面し、これが学生運動を継続・推進させる力の1つであった（花崎，1999，p. 97；増原，2012，p. 101）。

Usakti の学生による活動は、臆病だという評判を払しょくするための、少人数の学生による活動から始まったようである（SH00, p. 18）。初期の活動の1つは、スハルトの長女トゥトゥットがおこなっていた“*Aku Cinta Rupiah*”キャンペーン⁽⁸⁾の支援であり、各学部の自治会（*Senat Mahasiswa*）⁽⁹⁾が主導する形で行われた（SH00, p. 13, p. 24）。Usakti では学部ごとに自治会が組織されており、その自治会全体の1997-1998年の会長（*ketua Senat Mahasiswa Universitas Trisakti periode 1997/1998*）には Julianto Hendro Cahyono（以下、Hendro）が就いていた。Hendro は上記キャンペーンへの参加は見せかけのものであり、本当に求めたいのはスハルトの辞任であることを嗅ぎ取りつつ、学部横断的な活動を模索した（SH00, pp. 13-14）。最初、Aキャンパス等が位置するグロゴールとその近辺で、貧民に対する食料等の支援を行うことが合意されたものの、多額の資金が必要なため、実施は見合わされた（SH00, pp. 24-25）。

3月になると、ジャカルタから100kmほど西部にある海辺のリゾート地である Anyer やキャンパス内で会合がもたれ、国を変化（*perubahan*）させる必要があることが確認さ

(8) 直訳は、「僕はルピアを愛する」キャンペーンで、“*Love the Rupiah*” campaign（SH00, p. 13）、「ルピアを愛そうキャンペーン」（増原・鈴木，2014，p. 211）と訳されている。

(9) *Senat Mahasiswa* は学生による自治組織のことで、倉沢（2017，p. 36）の訳語である自治会に倣った。

1998年5月12日のトゥリスラクティの悲劇 (Tragedi Trisakti 98) について (河田)

れるとともに、全学的に行動することが合意された (SH99, p. 53; SH00, p. 26)。3月23日にAキャンパスで開催された9学部の自治会長によるオープン・フォーラムには約1,000名の学生が参加し、これが Usakti の学生が参加した初めての大規模な抗議運動となった (SH99, pp. 69-70; SH00, p. 35)。このフォーラムの内容は9点にまとめられ、同日に「民族の運命に対するトゥリスラクティ大学学生の懸念表明 (Seruan Keprihatinan Mahasiswa Trisakti terhadap Nasib Bangsa)」と題する声明として出された (RP99, p. 142)。

次の大きな抗議運動は4月18日のオープン・フォーラムであった。このフォーラムでは、C館の北にある門から Kyai Tapa 通りに出て西進の後、南進して Letjen S. Parman 通り²⁰を下り、L館の西にある正門からキャンパスに戻る (図2) という形で、キャンパス外での抗議運動のテストケースとなった (SH00, p. 36)。また、5月12日に抗議運動をおこなうことが決められた (SH00, p. 37)。

5月初旬には、スハルトが燃料価格や電気料金、公共交通機関の運賃の引き上げを発表したことから、これらの価格引き上げの取り消しを含む3つの要求が、5月5日に鉱山・エネルギー省 (Departemen Pertambangan dan Energi)、運輸省 (Departemen Perhubungan)、および MPR/DPR に提出された (SH99, pp. 59-61; SH00, pp. 31-32)。この初めての抗議の提出は、当初はすべての学部の自治会に支持されたわけではなかったが、5月7日の会議で全面的な支持が得られた (SH00, p. 32)。また、同日、国軍による Usakti への攻撃に備えて「トゥリスラクティ大学危機センター (Crisis Center Universitas Trisakti)」が設置された (SH99, p. 63)。翌8日にはAキャンパスが接する Kyai Tapa 通りや MPR/DPR ビルの前でデモがあり、Usakti の学生も参加した (RP99, p. 149)。

3.5. 当日のトゥリスラクティ大学の動き

5月12日の出来事は、必ずしも分単位での正確な記録が残されているわけではなく、文献によって記録された発生時刻や経緯が完全に同じではない場合がある。多様な資料や人々の記憶をもとに作成された Soekisno Hadikoemoro (1999, 2000) では、同一の出来事が異なる章で記載されている場合にも、こうした不整合が散見される。5月12日の事件の経過は、10時30分以降については自治会によって作成された年表があるため、以下では Soekisno Hadikoemoro (2000) に掲載されたその年表 (pp. 55-59) を基に整理をする。

²⁰ Soekisno Hadikoemoro (1999, p. 71) および Soekisno Hadikoemoro (2000, p. 36) では S. Parman 通りと表記されている。前後の内容から Letjen S. Parman 通りであることがわかる。S. Parman 通りとなっている個所は、他にも散見される。

10時30分以前について、Soekisno Hadikoemoro (2000, p. 39) は6時に抗議運動が開始され、国内外のレポーターが多数集まってきたとする。René L. Pattiradjawane (1999, p. 152) は5月11日の準備段階の描写も含めつつ、7時30分に自治会室での活動が始まったことや、10時頃^①からオープン・フォーラムの開会式が始まったことを記している。その他、時間は明確ではないが、5月12日付で自治会による6項目のプレスリリースと(SH00, p. 39)、同窓会による5項目の声明(SH00, p. 40)が出されている。

下の①から⑦までの記述は、断らない限り、Soekisno Hadikoemoro (2000) の年表(pp. 55-59)に基づくものであり、出典の記載は省略する。完全な直訳とはせずに説明を追加するなど、記述内容を改変した部分が少なからずある^②。なお、①～⑦の見出しは、本資料で新たに設けたものである。

① キャンパスでのオープン・フォーラム

10時30分～10時45分

M館の前の駐車場(図2のM館の北および西側の葉脈状に道があるあたり)でオープン・フォーラムが行われ、約6,000人が参加した。

10時45分～11時00分

マストの旗が下げられて半旗とされ、インドネシア国家(Indonesia Raya)が斉唱された後、直面している社会的、政治的困難に対する懸念を表明するための沈黙の時間もたれた。

11時00分～12時25分

教職員や学生によるスピーチが平和裡におこなわれた。

12時25分～12時30分

高速道路(図2)はフライオーバーのため周囲よりも高くなっており、オープン・フォーラムが開催されている駐車場を見下ろすことができる。このフライオーバーに数名の警察

① オープン・フォーラムの開始時間は、René L. Pattiradjawane (1999) の本文(p. 152)、Soekisno Hadikoemoro (1999) の本文(p. 75) および写真のキャプション(p. 123) では10時、Soekisno Hadikoemoro (1999) の年表(p. 96)、Soekisno Hadikoemoro (2000) の本文(p. 53) および年表(p. 55) では10時30分になっている。

② UPT. Humas Usakti (2020) は、オリジナルの年表に近く、入手が容易である。

1998年5月12日のトゥリスラクティの悲劇 (Tragedi Trisakti 98) について (河田)

官がいるのをみて、参加者が感情的になった。そのため、路上に出て MPR / DPR に対して政治的要求を表明するように求める声が上がりはじめ、一部の学生は正門を出て Letjen S. Parman 通り^㉓ に向かおうとし始めた^㉔。

② キャンパスの外へ

12時30分～12時40分

大学のセキュリティ・タスク・フォースは十分に警戒をしながら、学生たちに対して正門から出てから秩序だった形で歩き、路上で行儀よく振る舞うよう指導した。

12時40分～12時50分

開門後、学生たちは2枚の横断幕を掲げながら Kyai Tapa 通り、さらに Letjen S. Parman 通りへと進み、MPR / DPR に向かった (SH00, p. 43)^㉕。3つの集団に分かれつつ、スローガンを叫んだり愛国歌を歌いながら進み、その様子は平和的で秩序立っていた (SH00, p. 43)。

③ 西ジャカルタ市庁舎前での足止め^㉖

12時50分～13時00分

行進は西ジャカルタ市庁舎前で、治安部隊^㉗の二重のバリケードによって止められた。

13時00分～13時20分

治安部隊が行進を阻んだため、Hendro ら自治会の代表たちが西ジャカルタ軍 Amril

^㉓ Soekisno Hadikoemoro (1999, p. 97) では Jend. S. Parman 通り, Soekisno Hadikoemoro (2000, p. 55) では Jenderal S. Parman 通り, UPT. Humas Usakti (2020) では Jend. S. Parman 通りとなっているが、Letjen S. Parman 通りの間違いと考えられる。Soekisno Hadikoemoro (2000, p. 41) では S. Parman 通りと表記されている。

^㉔ Soekisno Hadikoemoro (2000, p. 41) では、(警察官の存在には言及せずに、) 午後に近づくにつれて、Usakti は市民と共にこの危機を平和裡に解決する手助けをしたいことを示すために、みんなが路上に出る必要がある、と参加者たちが話していたことを指摘している。

^㉕ Soekisno Hadikoemoro (2000) の年表では、どの門を使用したか明確には書かれていない。Soekisno Hadikoemoro (2000, p. 43) では、Kyai Tapa 通りに出たと書かれていることから、メインで用いられたのは正門ではなかったと考えられる。

^㉖ 1998年5月12日時点では、西ジャカルタ市庁舎は、現在の Universitas Tarumanagara の南側にあった(私信)。なお、Universitas Tarumanagara のキャンパスは、道を隔てて東西にある。一方は東側でトゥリスラクティ大学の南、他方は西側でチプトラモールの南に位置する。Universitas Tarumanagara の東側のキャンパスの南側にあった西ジャカルタ市庁舎の場所は、現在は空き地になっている。

^㉗ 国軍と警察の混成であるが、本資料では区別せずに治安部隊と呼ぶ。

Amir 中佐および西ジャカルタ警察 Herman 少佐と交渉し、MPR/DPR までの行進の継続と治安部隊による護衛を求めた (SE00, p. 53)²⁸⁾。この頃、市民も行進に加わり始めた²⁹⁾。路上での行進によって、大規模な交通渋滞が発生した (SE00, p. 44)³⁰⁾。

13時20分～13時30分

代表らが戻ってきて、交通渋滞や破壊行為をもたらしかねないという理由で行進が禁止されたことを伝えた。この頃、治安部隊の増援が4台のトラックで到着した。その後、再び集団は3つに分かれ、最大のもは Letjen S. Parman 通りの東側のもの、2つ目は高速道路、3つ目はチプトラモールの建物の外の集団であった (SH00, p. 43)。いずれのグループも、Usakti のセキュリティ・タスク・フォースで守られていた (SH00, p. 43)。

④ 路上でのオープン・フォーラム

13時30分～14時00分

学生たちは座るように説得された。路上でのオープン・フォーラムが始まり、その間、女子学生の一部が暴力を振るう意図がないことを示すために、赤いバラ (bunga mawar) を治安部隊に手渡した (SF00, p. 44)。治安部隊の増援が到着した。

14時00分～16時45分

自治会の代表と治安部隊との間で交渉が継続され、また、MPR/DPR に連絡をとる方

²⁸⁾ René L. Pattiradjawane (1999, p. 156) は、13時30分頃にゲロゴールで雨が降り始め、代表らが交渉を始めた頃には多くの学生がかなり雨に打たれていたものの、そのままとどまっていたとしている。

²⁹⁾ Soekisno Hadikoemoro (2000, p. 44) は、市民らに加わり始めたものの、学生たちの集団からは少し距離を置いていた (5m ほど離れていた) としている。

³⁰⁾ Usakti とチプトラモールの間には、大きく6つの道路 (それぞれが複数車線を有する) があり、大学側 (東側) から① Letjen S. Parman 通り (Usakti の A キャンパスの西沿いを走る南向き車線で、すぐ北で Kyai Tapa 通りと接続する)、② Letjen S. Parman 通り (高速道路に接しながら、高速道路と同じくフライオーバーになっている)、③ 高速道路 (南向き車線)、④ 高速道路 (北向き車線)、⑤ Satria 道 (Letjen S. Parman 通りの北向き車線から分岐して運河を横切り、高速道路に接しながら、高速道路と同じくフライオーバーになっている)、⑥ Letjen S. Parman 通り (チプトラモールの東沿いを走る北向き車線) となっている (図2)。これらのうち、①と②は Usakti の正門前あたりで合流し、⑤と⑥はチプトラモールの南にある Universitas Tarumanagara の前あたりで合流する。このため、西ジャカルタ市庁舎前あたりでは、東から順に Letjen S. Parman 通り (南向き車線で①と②が合流したもの)、高速道路 (南向き車線の③)、高速道路 (北向き車線の④)、運河、Letjen S. Parman 通り (北向き車線で⑤と⑥に分岐するもの) となっている。路上での行進によって、Senayan 方面に向かう交通の渋滞が起きた (SH00, p. 44) というのは、これらのうち、①～②を中心に、これらの道路が人で埋まったためと考えられる。なお、Usakti の正門を出て、そのままフライオーバーの下を通過して⑥ Letjen S. Parman 通りにいくことが可能である。

1998年5月12日のトゥリサクティの悲劇 (Tragedi Trisakti 98) について (河田)

法を自治会が模索する一方で、オープン・フォーラムが続行された。雨は土砂降りになるが集団はそのままとどまった。学生らも治安部隊も相互に相手の出方を伺う様子であった。

結局、行進の許可は得られなかった (以下, SH00, p. 45)。オープン・フォーラムの間、次第に帰路につく学生が出始めた。こうした行動が許可されていたのは16時までであったため、時間が近づくと、治安部隊のトップらは学生らの集団に共感を示しつつも、キャンパスに戻るよう示唆した。

⑤ Mashud の挑発³¹⁾

16時45分～16時55分

オープン・フォーラムをおこなっている路上から大学のキャンパスに戻ることを、学生は当初拒否したが、法学部長 (兼、危機センター長) Adi Andojo Soetjipto, 経済学部長 Chairuman Armia, 自治会長 Hendro が説得し、同意が得られた³²⁾。

16時55分～17時00分

学生たちはゆっくりと秩序だつてキャンパスに戻り始め、治安部隊も撤退を始めた (SH00, p. 54)。この時、かなり強い雨が降っていた (SH99, p. 95 ; SH00, p. 54)³³⁾。A キャンパスを囲むように走る Letjen S. Parman 通りや Kyai Tapa 通りの歩道沿いには、現在でも多くの屋台 (kaki lima と呼ばれるものなど) が出ているが、学生の中には、こうした店に立ち寄りたり、授業後、帰宅までの時間をキャンパス内で過ごすといった、日常と同様のことをしているものもいた (SH00, p. 54)。この頃には、雨は小降りになっていた (SH99, p. 95)。

5 時になる直前に (SH00, p. 47), 元 Usakti の学生だと主張する男性 (Mashud)³⁴⁾ が、路上で学生たちに向かって露骨に挑発となるようなことを叫んだ。この挑発は、学生たちを激怒させた。学生たちには、Mashud が私服のインテルか、お金で雇われた挑発者のよ

³¹⁾ Soekisno Hadikoemoro (2000) は、第7章 (pp. 47-48) のタイトルを「May 12 - The Trigger」にして Mashud (Mashud'l Haq Abidin) の挑発を取り上げることで、Mashud の行動が引き金になったとほめかしているようである。

³²⁾ この前後の頃と思われるが、Soekisno Hadikoemoro (2000, p. 53) は、約1,000人の学生が残っていたとしている。西ジャカルタ軍 Amril Amir 中佐と西ジャカルタ警察 Timur Pradopo 中佐は演壇に招かれ、演説を行い、その中で、路上の行進やオープン・フォーラムが平和裡に行われたことに感謝した (SH99, p. 94 ; SH00, p. 54)。

³³⁾ Soekisno Hadikoemoro (2000, p. 45) は、16時50分には既に雨が強くなっていたとしている。

³⁴⁾ 後日、Mashud は1970年代に Usakti に在籍していたが中退したことが、Usakti の記録で確認された (SH00, p. 47)。

うに見えた⁶⁵⁾。

17時00分～17時05分

Mashud による挑発が起きた時、ほとんどの学生はキャンパスに戻っていた。路上にいた学生だけでなく、既にキャンパスにいた学生も路上に戻ってきて Mashud を追って捕まえ、殴打しようとした (SH00, p. 47)。Mashud が治安部隊の中に逃げ込こんだことから、学生と治安部隊が衝突し、押し合いが起きた。Usakti のセキュリティ・タスク・フォースは衝突を取めた後、治安部隊に、双方がこの場を離れるよう提案した。

⑥ 銃撃

17時05分～18時30分

学生がキャンパスに戻ると、治安部隊の一部が学生らを嘲笑し、この挑発にのった学生が3名、踵を返したものの、Usakti のセキュリティ・タスク・フォースになだめられ、落ち着きを取り戻した。

治安部隊が実弾と催涙ガスを学生たちがいる方向に撃ち始めた⁶⁶⁾。銃撃は、上空に向けた威嚇射撃を伴わないもので、正規の手順を逸脱した行為であった (SH99, p. 87, p. 91 ; SH00, p. 49, p. 52)。狙撃者が現れたという声も聞こえ始めた。学生たちはパニックに陥りながら、大きく4つの集団に分かれ、①西ジャカルタ市庁舎、② Universitas Tarumanagara の東側キャンパス、あるいは③ Taman S. Parman 通り沿いの団地 (Universitas Tarumanagara の東側キャンパスの南側一帯) に逃げ込んだり、④ Usakti の A キャンパスに戻ろうとした (RP99, p. 13)。治安部隊は催涙ガスやゴム弾を撃ち続けるとともに、こん棒やライフルの床尾で学生を殴打した。

その後、緊急対応部隊 (Unit Reaksi Cepat) の頭字語 URC をつけたジャケットを着た増援が、バイクで到着した。Usakti のキャンパスに戻ろうとする学生や、キャンパス内の学生に向けて、高速道路があるフライオーバー (写真1 ; 図2の矢印③) の方向から Usakti の正門とその手前のフライオーバーを撮影したもの) などからの発砲が続き、多数の死傷者が出た。17時30分から18時の間に、再度銃撃が始まった時にM館のガラスが割れる音を聞いて、明らかに自分たちが狙われていると感じた、という証言が、René L. Patti-

⁶⁵⁾ 治安部隊は、Mashud が治安部隊側の挑発者であるとは認めなかった (SH00, p. 47)。

⁶⁶⁾ 銃撃開始時刻は、「17時頃に最初の銃撃を聞いた」(RP99, p. 16)、「最初の銃撃を聞いた時、時計は17時10分であった」(RP99, p. 22) など、人によって若干の異同がある。



写真1 トゥリスアクティ大学正門とフライオーバー
(2020年3月9日筆者撮影)

radjawane (1999, pp. 56-57) に収められている。

実弾によって4名が死亡した。また、重体、重傷者が出た(3.6参照)。René L. Patiradjawane (1999) は、17時30分から18時30分の間の被害者を描いた図7 (p. 87) で、キャンパスでの被害者の位置を示している。

18時30分～19時00分

銃撃が収まり始め⁶⁷⁾、学生らは負傷者を隔離して、病院への搬送に備えた。18時30分の夕暮れ時、ヘリコプターが飛来してC館に5人の狙撃者が降下するのが目撃された (SH00, p. 50)。目撃者の証言では、射撃はC館の3、4階とフライオーバーからなされた (SH99, p. 70, p. 88 ; SH00, p. 50)。

19時00分～19時30分

黒色の制服を着た複数の人物が駐車場にいるのを見つけた学生たちが、再びパニックに

⁶⁷⁾ Usakti のある従業員は18時30分の少し前に、発砲が散発的になりだしたと述べている (RP99, p. 54)。

陥った。狙撃者はC館の最上部にいた。学生たちは空いている教室や小さなモスク (Musholla) に駆け込み、照明を消して隠れた。

⑦ その後

19時30分～20時00分

しばらくして比較的安全になったので、学生たちは隠れていた場所から離れ始めた⁸⁸⁾。経済学部長 Chairuman Armia が学生を帰宅する方法を模索し、西ジャカルタ警察の Arthur Damanik 大佐と話し合った。一度に5名より多くのグループにならないことを条件に、学生が安全に帰宅できることが保証された。

20時00分⁸⁹⁾～23時25分

学生が順に帰宅し始めた。Sumber Waras 病院に搬送された6人の学生が死亡⁹⁰⁾を宣言され、数十人が重傷を負ったと、20時45分頃に多くの人が話していた (以下, SH00, p. 51)。学長 H.R. Moedanton Moertedjo, 法学部長 Adi Andoyo Soetjipto, トゥリサクティ財団長 Trisulo ほか、大学の職員が病院を訪れた。21時30分に Adi Andoyo はキャンパスに戻って記者会見を開き、銃撃の開始はほとんどの学生がキャンパス戻った後であったため、治安部隊の行動は不当であったと述べた。

22時にキャンパスに到着した国家人権委員会 (Komisi Nasional Hak Asasi Manusia) の Marzuki Darusman は、キャンパスで学生が殺害されたという事実だけで人権侵害は明らかだと述べた (以下, SH00, p. 52)。22時30分にジャカルタ軍司令官 Hendarji 大佐は、Sumber Waras 病院の負傷者を慰問した。

真夜中

真夜中に国家人権委員会の Albert Hasibuan は病院を訪れ、死者と負傷者の状況から、大半の学生は走っている時に撃たれたことや、背後から撃たれた学生は、治安部隊に花を手渡すために参加していたことなどを指摘した (SH00, p. 52)。

⁸⁸⁾ 銃声が収まった時間にも異同があり、「銃撃は19時15分まで続いた」(RP99, p. 86)、「ちょうど20時頃に銃声は聞こえなくなった」(RP99, p. 39)といった証言がなされている。

⁸⁹⁾ Soekisno Hadikoemoro (2000) では22時00分となっているが、誤植である。

⁹⁰⁾ この誤報は尾を引いた。翌日には4名死亡と確認されていたが (SH00, p. 59)、大半の日刊紙は5名ないしは6名死亡と誤って伝え (SH00, p. 62)、直後のみならず、2010年代に出版された複数の日本語の文献でも、6名や7名死亡と間違っって書いてあるものが散見される。なお、UPT. Humas Usakti (2020) は、12日の20時の時点で4名の死亡と1名が危機状態であることが確認されたとしている。

3.6. 被害者

① 死亡者

Elang Mulia Lesmana (Elang) は土木工学・計画学部建築学科 (Fakultas Teknik Sipil dan Perencanaan, Jurusan Arsitektur) の学生で、1996年に入学した。1978年7月5日に、ジャカルタで生まれた。18時30分頃、M館の西側で右胸から背中左側に貫通する形で撃たれた (SH00, p. 66, p. 131)。撃たれた時は意識があり、話しをすることができ、友人たちが安全な場所に移したが、その後、Sumber Waras 病院への搬送中に死亡した (SH00, p. 66, p. 131)。6.22m の高さで47.77m の距離 (水平距離では47.37m) の場所から撃たれたと推定されている (RP99, p. 96)。

Hery Hartanto (Tanto) は産業技術学部機械工学科 (Fakultas Teknologi Industri, Jurusan Teknik Mesin) の学生で、1995年に入学した。1977年2月5日に、ジャカルタで生まれた。M館前の旗竿の前で背中左側から撃たれ⁴⁾、弾丸は心臓のところで止まった。病院への搬送中に死亡した (SH00, p. 66, p. 134)。6.68m の高さで98.95m の距離 (水平距離では98.73m) の場所から撃たれたと推定されている (RP99, p. 97)。体内に残っていた弾丸は、1998年6月7日に墓を開けて体内から回収された (RP99, p. 97, p. 99)。

Hendriawan Sie (Hendriawan) は経済学部経営学科 (Fakultas Ekonomi, Jurusan Manajemen) の学生で、1996年に入学した。1978年3月3日に、東カリマンタンで生まれた。正門の南に隣接しキャンパス内を通る自動車用の道路沿いで首を撃たれた (SH00, p. 66)。L館に移された時は息があったが、Sumber Waras 病院に行く前に死亡した (SH00, p. 66)。4.5m の高さで47.14m の距離 (水平距離では46.92m) の場所から撃たれたと推定されている (RP99, p. 98)。

Hafidhin Royan (Idien) は土木工学・計画学部土木工学科 (Fakultas Teknik Sipil dan Perencanaan, Jurusan Teknik Sipil) の学生で、1996年に入学した。1976年9月28日に、バンドンで生まれた。M館前で右耳上部のこめかみを撃たれ、弾丸は後頭部にとどまり、他の学生たちが助けた時はまだ生きていた (SH00, p. 67, p. 138)。Tanto と共に Sumber Waras 病院に搬送された (RP99, p. 58, p. 61)。6.78m の高さで92.43m (水平距離では92.19m)、もしくは、6.2m の高さで96.99m (水平距離では96.79m) の場所から撃

4) 2020年4月末時点、インドネシア語版 Wikipadeia の Tragedi Trisakti に掲載の Peta situasi Trisakti pada 12 Mei, 1998および英語版の Trisakti shootings に掲載の A map of the situation at the Trisakti campus では、Tanto と Idien の被弾場所は中庭となっているが、間違いである。また、Elang と Hendriawan の被弾場所も不正確である。

たれたと推定されている (RP99, p. 98)。

治安部隊による射撃の様子は、CNN, ABS Australia などによって放映され、衝撃を与えたとともに (RP99, p. 118; SH00, p. 50), フライオーバーからの射撃の様子も海外のTVに捉えられた (複数のキャプチャーが、René L. Pattiradjawane (1999, pp. 118-119) に収められている)。4人を撃った射手の位置は、チプトラモールではなくフライオーバーとされており (RP99, p. 98, p. 104; SH00, p. 85), これは上記の4名の射撃場所の検証結果とも整合的である。使用された銃器は、René L. Pattiradjawane (1999) で、非常に詳しく検証されている。

② 重体・重傷者

5名の重体, 17名の重傷者が出たとされている (以下, SH00, p. 67)。重体はすべて Usakti の学生で, その中には自治会長の Hendro が含まれていた。重傷者の中には隣接する Universitas Tarumanagara の学生や高校生, 市民も含まれていた。

3.7. 翌13日のトゥリスアクティ大学の動き

午前1時30分にジャカルタ警察本部でジャカルタ軍総司令官 Syafric Syamsuddin 少将による記者会見が行われ, ジャカルタ警察 Hamami Nata 少将, トゥリスアクティ大学学長 Moedanton Moertedjo, 国家人権委員会の2名のメンバーが参加した (SH00, pp. 54-55; UPT. Humas Usakti, 2020)。3時10分に4名の遺体が Sumber Waras 病院から Usakti に移され, M館のロビーに安置されて (SH00, p. 66, p. 71), 4時30分から通夜が営まれた (SH00, p. 71)。夜明け1時間前⁴²⁾に学生たちがM館に集まり始め, 5時から告別式が行われた (SH00, p. 72)⁴³⁾。5時30分に遺体が家族に戻された (SH00, p. 71)。6時15分に, 棺を載せた救急車が南ジャカルタ市の Elang の家, 東ジャカルタ市の Tanto の家, 西ジャカルタ市の Hendriawan の家, バンドンの Idien の家に到着した (SH00, p. 72)⁴⁴⁾。

13時30分に Tanto, 13時40分頃に Elang の棺が南ジャカルタ市の Tanah Kusir 共同墓地に到着し, 様々な大学から15,000人の学生が参列する中, 並んで埋葬された (SH00,

⁴²⁾ ジャカルタの5月12日の夜明けは5時30分頃であるため, 4時30分頃を指すと思われる。

⁴³⁾ ここでは, memorial ceremony を告別式と訳した。8時からの予定であったものが, Syafric Syamsuddin 少将の訪問にあわせて5時からに変更され, そのことを知らない学生の中には式に遅れるものが出た (SH00, p. 72)。

⁴⁴⁾ 5時30分の引き渡しは大学の出発時間とすると, 45分でバンドンに到着することは困難と思われるが, 原出典の記述の通りに引用した。

1998年5月12日のトゥリスラクティの悲劇 (Tragedi Trisakti 98) について (河田)

pp. 74-75)。葬儀は15時30分に終了した (SH00, p. 75)。Idien はバンドンで埋葬され、Hendriawan は西ジャカルタ市の Al-Kamal 共同墓地に埋葬された (SH00, pp. 75-76)。

A キャンパスでは、M館のテラスと芝生、および、Letjen S. Parman 通りや Kyai Tapa 通りとキャンパスを隔てる約350m のフェンス沿いに花輪が置かれた (SH00, p. 72)。講義はすべて中止となり (SH99, p. 103)⁴⁵⁾、10時間におよぶオープン・フォーラムが開催された (SH00, p. 79)。それに先立ち、大学葬 (funeral) の最中にメガワティ・スカルノプトリやアミン・ライスをはじめとする反体制派の多数の要人が、哀悼の意を表すために、A キャンパスを訪問した (SH00, p. 79)。一部の要人はオープン・フォーラムの終了後まで残り、M館の12階で Usakti の学生や教職員とともに、抗議運動でスハルトの追放を掲げることに合意した (SH00, p. 80)。

3.8. ジャカルタ 5月暴動

翌13日と14日に、暴動が発生した (図1参照)。暴動は、Usakti が所在するグロゴールで始まったとされ (SH00, p. 97)、午後までには、ジャカルタ首都特別州の5つの行政市の全てで散発的に発生するとともに (SH00, p. 98)、隣接するタンゲランにある衛星都市やブカシにも暴動が広がった (SH00, p. 99)。標的とされたのは、主に華人系インドネシア人で、1,000人以上の死者が出たと言われている。華人が標的とされたのは、総人口の3%ほどの華人が、スハルトの下で国の経済の70%をコントロールしているためと、当時は説明されることが多かったようである (SH00, p. 98)。インドネシアでは、政治混乱などで社会が不安定な時は、人々の不満の矛先が華人に向けられがちであり (倉沢, 2014, p. 26; 岩崎, 2017, pp. 140-141)、このジャカルタ 5月暴動以前にも、1973年8月にはバンドンで反華僑暴動が、1974年1月にはジャカルタでマラリ事件が起きている。

ジャカルタ 5月暴動のきっかけになったのは、しばしば5月12日の4名の学生の殺害であるとされる (SH00, p. 97; RP99, p. 160; 増原・鈴木, 2014, p. 216)。しかし、同時に、この暴動には火付け役がいて、部外者が始めたという指摘がなされている。例えば、村井・佐伯 (1998, p. 56) は、「「暴徒」はジャカルタ以外の場所からトラックに乗せられて連れてこられたともいう」と指摘する。Soekisno Hadikoemoro (2000, p. 98) は、同

⁴⁵⁾ トゥリスラクティ大学広報部でのヒアリングによると、事件後、Usakti は1週間休みになった。また、A キャンパスには、献花のためや、何が起きたのか、どこで撃たれたのかを知りたい人たちが約1か月の間、多く訪れたとのことであった。他大学でも授業がキャンセルされた (SH00, p. 62)。

様に、兵士と思しき若い男性がきて略奪をそそのかしたという報告を採録し、略奪を始めた暴徒は部外者であったという市民の声を拾っている。暴徒を目の前にして、軍隊はただ見て笑っているだけで止めようとはせず、むしろ煽っている節すらあったという（村井・佐伯, 1998, p. 56; SH00, p. 98）。増原（2012, p. 108）は、「国軍内部の人間による扇動行為があったのではないかとされている」としている。糸を引いていたのはスハルトの娘婿のブラボウォで、国軍司令官のウィラントから権力を奪うためであったと推察されることが多い（村井・佐伯, 1998, p. 57; SH00, pp. 100-101; 佐藤, 2011, p. 85）。なお、Usakti のキャンパスへの銃撃をおこなった国軍と警察はウィラントの指揮下にあったことから、ウィラントはスハルトとともに責任を追及された（SH00, p. 62, pp. 83-84）。

グロゴールで暴動が発生した時、学生はAキャンパス内にとどまり、暴徒には加わらなかった（SH00, p. 97）。学長 Moedanton Moertedjo とインドネシア大学の人民闘争センター（Posko Perjuangan Rakyat UD）は、12日の4名の学生の殺害とジャカルタ5月暴動の間には何の関係もないこと、学生が暴動に関与したことも、これから関与することもないことを強調した（SH99, p. 149; SH00, p. 101）。

3.9. スハルトの辞任とその後

12日の4名の学生の殺害は、結果的に学生運動の大学間連携を強め（SH00, p. 103）、13日には、多くの大学のキャンパスで抗議行動やオープン・フォーラムが行われた（SH00, p. 62）。各地で半旗の旗が掲げられ、ほとんどの人が、4名の殺害の悲しみと怒りを共有した（SH00, p. 62, p. 64）。

カイロで開催のG15に出席するために、スハルトは5月9日にエジプトに飛んでいたが、この事件の発生を受けて予定を早め、5月15日に帰国した。翌16日には、内閣改造の意向を表明したものの、18日には、抗議のために朝から多数の学生がMPR/DPRビルに集結し、また、国会は大統領辞任勧告を出した。19日には、MPR/DPRビル集まってきた学生に軍隊が入ることを許可したという（SH00, p. 110）。21日、スハルトは辞任し、副大統領のハビビが大統領に就任した。

スハルト体制の終焉は、「5月政変」や「1998年政変」と呼称される。佐伯（2013, p. 193）は、アジア通貨危機からこの政変に至る背景には「通信技術の発達にともなう自由な情報の流れ」があったことを指摘している。増原（2012, p. 107）は、この政変が「インターネットを使った初めての革命」と呼ばれることがあることを紹介している。こうした新しい流れに乗って生じた政変ではあったが、その後すぐにインドネシアに民主化と安

定した社会をもたらしたわけではなかった。

経済面では、5月12日の4名の学生の殺害は、アジアの金融市場にショックを与えた (SH99, p. 140 ; 00, p. 86)。スハルトの失策と辞任は、アジア通貨危機の影響と相まってインドネシア経済に大打撃を与え、1998年の実質 GDP 成長率は-10%を大きく下回った (佐藤, 2011, p. 17 ; 加納, 2017, p. 79) 政治面では、1999年、2000年、2001年、2002年と4年連続で憲法が改正され、2001年の改正では、正副大統領の直接選挙制度が導入された。初の直接選挙は2004年に実施され、スシロ・バンバン・ユドヨノが第6代大統領に選出されたことで、民主主義体制が確立した (佐藤, 2011, p. 18)。

3.10. 現在の様子

5月12日の事件を伝えるものは、現在、様々な形で残されている。Hendriawan の出生地である東カリマンタンの Balikpapan では、事件後、通りの名称が SMA Meratus 通りから Hendriawan Sie 通りに変更され (SH99, p. 193 ; SH00, p. 76 ; UPT. Humas Usakti, unknown), 現在に至っている。Aキャンパスの建物のうち、4棟の名称は4人の名前を冠する形に変更された。現在、C館は土木工学・計画学部が用いており、Hafidhin Royan と Elang Mulya Lesmana の名前が付けられている。F館とG館は産業技術学部が用いており、Hery Hartanto の名前が付けられている。S館は経済・ビジネス学部が用いており、Hendriawan Sie の名前が付けられている (SH99, p. 183 ; 私信)。駐車場の一角にはモニュメントが建立され (図2の② ; 写真2), 4名が被弾した場所には、そのことを示す印が付けられている (図2の4つの◎ ; 写真3)。Kyai Tapa 通り沿いの門横の壁面にはモニュメントが設けられ (図2の④ ; 写真4), Letjen S. Parman 通り沿いの正門には、「改革の英雄のキャンパス (Kampus Pahlawan Reformasi)」と書かれている (写真5)。これら2つの通りが接続するあたりの歩道にも、モニュメントが作られている (図2の① ; 写真6)。1999年に、M館の1階 (グランドフロアー) に博物館 (Museum Reformasi 12 Mei 1998 Universitas Trisakti) が開館した (UPT. Humas Usakti, unknown) (図2の③)。トゥリスアクティ大学広報部でのヒアリングによると、M館1階のこの場所は、4名の棺が置かれた場所であり、また、実弾が貫通した窓ガラス⁴⁶⁾が残った印象深い場所であることから、博物館の場所として選ばれた (写真7~9 ; 外部の写真9は図2の矢印②の方向から撮影)。

⁴⁶⁾ Soekisno Hadikoemoro (2000, p. 96) の表現を踏襲して「窓ガラス」とした。

5月12日の悲劇は、現在でも Usakti の学生に影響を与えている。筆者はこの博物館を幾度か訪れた際に、少数ではあるが、毎回のように見学に来る学生に出会った。また、T館の体育館の前(図2の⑤)では、2020年2月17~21日の間、「Elang Cup 2020」と称して土木工学・計画学部の学部生によるブースが設けられ(写真10)、3月9~13日には、Hafidhin Royan Cup という形で、別の催しがなされていた(写真11)⁴⁷⁾。

先述のように Usakti は独立記念塔から比較的近い。2019年9月下旬に、独立記念塔近辺等で学生団体によるデモが行われた際、筆者は、その一部と思われる集団が、Letjen S. Parman 通りを南下する時に鉢合わせになった(写真12; 図2の矢印①の方向から撮影)⁴⁸⁾。民主化が成し遂げられたとはいえ、いぜんとして様々な課題が残っていることが垣間見られた。



写真2 駐車場のモニュメント

(2019年11月1日筆者撮影)

⁴⁷⁾ Elang と Idien の Cup が土木工学・計画学部の学部生によって体育館前で催されたのは、両名が土木工学・計画学部の所属であり、体育館前は C 館の入り口とほぼ向かい合わせになっているためと考えられる。3月14~15日の土日を挟んで、16日は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響で、ジョコ・ウィドド大統領等が声明を出したことから大学に来る学生は激減し、17日から Usakti では、講義室での授業は中止になり、キャンパスではほとんど学生を見かけなくなった。そのため、それ以降の催しは確認できていない。

⁴⁸⁾ 後日、Usakti で筆者を受け入れている教員から、事態がさらに深刻化した時は、筆者を自宅にかくまう必要があると考えていたことを聞いた。

1998年5月12日のトゥリスアクティの悲劇 (Tragedi Trisakti 98) について (河田)



写真3 4名の被弾場所を示す印
(2020年3月4日および14日筆者撮影)



写真4 Kyai Tapa 通り沿い門横壁面のモニュメント
(2019年11月1日筆者撮影)



写真5 正門正面右側のメッセージ
(2020年3月11日筆者撮影)



写真6 歩道のモニュメント
(2019年11月1日筆者撮影)

1998年5月12日のトゥリスラクティの悲劇 (Tragedi Trisakti 98) について (河田)



写真7 博物館内部
(2020年3月4日筆者撮影)



写真8 博物館内部 (実弾貫通場所)
(2020年3月4日筆者撮影)



写真9 博物館外部（実弾貫通場所）
(2020年3月4日筆者撮影)



写真10 体育館前での Elang Cup 2020
(2020年2月19日筆者撮影)

1998年5月12日のトゥリスラクティの悲劇 (Tragedi Trisakti 98) について (河田)



写真11 体育館前での Hafidhin Royan Cup
(2020年3月11日筆者撮影)



写真12 Aキャンパス横でのデモの様子
(2019年9月25日筆者撮影)

4. お わ り に

本資料は、主として René L. Pattiradjawane (1999) と Soekisno Hadikoemoro (1999, 2000) に依拠して、日本語では断片的にしか情報が入らないトゥリサクティの悲劇を紹介したものである。なぜ4名の学生が命を落としたのか、誰が射手だったのか、5月12日の悲劇や13～14日のジャカルタ5月暴動の糸を引いていた人物がいるとすれば、それは誰だったのか、既に議論や推論はなされているものの、合意された結論に達しているわけではない。1998年に行われた裁判では、実弾を撃って4名の死者を出したのではなく、手順を踏まずに実弾発砲をおこなったことが問われ、判決が下されるにとどまった (SH99, p. 4, p. 175 ; SH00, pp. 119-120)。人権侵害が不問に付されたままという意味で、5月12日の悲劇は、現在も未解決の事件である (佐伯, 2013, p. 208)。

主として依拠した Soekisno Hadikoemoro (1999, 2000) は、事件後1～2年の間に、ヒアリング、新聞、雑誌等のソースを参照しつつ、まとめられたものである。これら文献の複数の章に分散する記述を、本資料では、なるべく時間の流れに沿って集約し、整理しなおした。その過程で、Usakti 側は、学生の行動が過激にならないよう、非常に注意深く準備をしていたことを、随所から十分に推察できた。4月18日には、キャンパス外での抗議運動の、いわば予行練習をおこなっている。5月12日は、学生が過激にならないようにセキュリティ・タスク・フォースが事前に学生を指導し、路上でのオープン・フォーラムの頃には女子学生が治安部隊にバラを手渡し、平和裡に抗議運動を進めたい意思を明確に示している。Mashud による挑発の後、治安部隊と学生が押し合いになったものの、これもセキュリティ・タスク・フォースによって収められている。その後の、治安部隊による挑発も、セキュリティ・タスク・フォースが挑発に乗った学生をなだめて事なきを得ている。こうしてみると、個々の学生の中には成り行きで暴力行為に及んだり、及びかけたものがいたものの、セキュリティ・タスク・フォースが十分に対処し、予防した。また、運動を組織した自治会は、終始、平和裡に抗議行動をおこなう意思を持っていたことは、疑うべくもない。

主として依拠した文献が、Usakti の関係者によるもの、という点を割り引く必要があるにせよ、Usakti 側に大きな落ち度があったとは考え難い。Mashud やその後の治安部隊による挑発が収まった頃、ほとんどの学生がキャンパスに引き上げていたにも拘わらず、何の警告もなく、さらには何の脈絡もなしに治安部隊が攻撃を始めた、と言わざるを得な

1998年5月12日のトゥリスラクティの悲劇 (Tragedi Trisakti 98) について (河田)

い。こうした点を含め、未解明・未解決の事柄・問題が、今後解消していくことを期待する。事情により、著者は参加することは叶わなかったが、例年5月12日には、多くの学生が Usakti から MPR/DPR ビルに向けて行進をしたり、ホテルインドネシアのロータリーに集まるという (私信)。こうした行動が、よい意味で不要になる時代が、早く来ることを願う。

謝 辞

本資料の作成にあたり、トゥリスラクティ大学の Dr. Ir. Rully Besari Budiyanti, M. Kes 氏, Dewi Anggraini, Str 氏, Sularno 氏, Rosma Said 氏には、資料の提供、ヒアリングなどに対応していただき、また屋内写真の使用許可をいただきました。経済・ビジネス学部の Muhammad Zilal Hamzah 先生と Eleonora Sofilda 先生には、多大なご支援を賜りました。ここに記して感謝いたします。

引用文献

* インドネシア語文献

- Anggie D. Widowati. 2003. *Langit Merah Jakarta*. Grasindo.
- Ngatma'in. 2015. Konflik politik dalam *Langit Merah Jakarta* karya Anggie D. Widowati. *Beranda* 15(1): 1-16.
- Presidium Mahasiswa Universitas Trisakti. 1999. *12 mei dalam kata-kata*. Unit penerbitan dan percetakan Universitas Trisakti.
- René L. Pattiradjawane. 1999. *Trisakti Mendobrak Tirani Orde Baru: Fakta dan Kesaksian Tragedi Berdarah 12 Mei 1998*. Grasindo.
- Soekisno Hadikoemoro (bersama Pers Mahasiswa USAKTI). 1999. *Tragedi Trisakti 12 Mei 1998*. Universitas Trisakti.
- Unit Pelaksana Teknis Hubungan Masyarakat (UPT. Humas Usakti). 2020. Sejarah 12 Mei 1998 (Sejarah Reformasi). (2020年5月11日閲覧)
<http://en.humas.trisakti.ac.id/museum-tragedi-12-mei-1998/sejarah>
- Unit Pelaksana Teknis Hubungan Masyarakat (UPT. Humas Usakti). unknown. *Museum "Reformasi 12 Mei 1998" Universitas Trisakti*.

* 英語文献：

- Coppel, Charles A. 2017. Reassessing assumptions about Chinese Indonesians (October 26, 2017). *Indonesia at Melbourne* (Editor: Tim Mann). (2020年4月22日閲覧)
<https://indonesiaatmelbourne.unimelb.edu.au/reassessing-assumptions-about-chinese-indonesians/>
- Soekisno Hadikoemoro (with Trisakti University's Student Press). 2000. *The Trisakti Tragedy 12 May 1998*. Trisakti University Press. (English translation: Lely Triana Djuhari)

- Trisakti University. 2020. *About Trisakti: Brief History*. (2020年4月21日閲覧)
<http://en.trisakti.ac.id/>
- Welch, Anthony R. 2011. *Higher Education in Southeast Asia: Blurring Borders, Changing Balance*. Taylor & Francis.

- * 日本語文献
- 岩崎育夫 (2017) 『入門 東南アジア近現代史』講談社現代新書.
- 外務省 (2017) 「諸外国・地域の学校情報：インドネシア」(平成29年12月更新情報) (2020年4月21日閲覧).
- 外務省 (2020) 「世界と日本のデータを見る (令和2年3月6日)」(2020年4月12日閲覧).
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/world.html>
- 加納啓良 (2017) 『インドネシアの基礎知識』めこん.
- 倉沢愛子 (2014) 『9・30 世界を震撼させた日__インドネシア政変の真相と波紋』岩波現代全書.
- 倉沢愛子 (2017) 「九・三〇事件とインドネシアの華僑・華人社会：レス・プブリカ大学襲撃事件から見えること」『アジア・アフリカ言語文化研究』93：25-64.
- 佐藤百合 (2011) 『経済大国インドネシア』中公新書.
- 西岡尚也 (1993) 「第11章 タイの北部を見て歩く」坂口慶治他編『アジアの何を見るか』古今書院, 97-105.
- 西村重夫 (1998) 「〈現地通信〉 ジャカルタ1998年5月」『東南アジア研究』36(2)：258-269.
- 日本経済新聞 (2017) 「ジャカルタ暴動 「経済を支配」華人標的に 次世代を導く(2)」2017年1月15日. (2019年12月2日閲覧)
https://www.nikkei.com/article/DGXLASM304H05_Y7A100C1SHA000/
- 花崎泰雄 (1999) 「スハルト体制崩壊とインドネシア学生運動—1998年世代の功績と限界—」『埼玉大学紀要 教養学部』35(1)：95-111.
- 水本達也 (2006) 『インドネシア 多民族国家という宿命』中公新書.
- 舟田京子・高殿良博・左藤正範編 (2018) 『プログレッシブ インドネシア語辞典』小学館.
- 増原綾子 (2012) 「チュニジアとエジプトの政変を考える—インドネシア政変との比較の視座から—」『国際関係紀要』21(1・2)：97-136.
- 増原綾子・鈴木絢女 (2014) 「二つのレフォルマシーインドネシアとマレーシアにおける民主化運動と体制の転換・非転換—」『日本比較政治学会年報』16：207-231.
- 村井吉敬・佐伯奈津子 (1998) 『インドネシア__スハルト以後』岩波ブックレット.
- 村井吉敬・佐伯奈津子・間瀬朋子 (2013) 『現代インドネシアを知るための60章』明石書店.
 - 倉沢愛子 (2013) 「30 近現代史概説_「多様性のなかの統一」を目指した近代国家への道」 pp. 182-186.
 - 佐伯奈津子 (2013) 「32 スハルト体制と民主化_改革は進んだのか」 pp. 191-195.
 - 佐伯奈津子 (2013) 「35 人権_連綿とつづく「不処罰」の慣習」 pp. 206-210.
 - 笹岡正俊 (2013) 「41 民族紛争と宗教紛争_スハルト体制末期から崩壊後にかけての紛争を中心に」 pp. 240-244.
 - 佐藤百合 (2013) 「45 産業構造の変化_分散した成長エンジン」 pp. 263-267.

- * ヒアリング
- トゥリサクティ大学広報部 (Unit Pelaksana Teknis Hubungan Masyarakat (UPT. Humas) Usakti) 2020年3月4日.